
編集後記

忌まわしい戦争の勃発，COVID-19 波状流行の常態化，要人暗殺，エネルギー資源不足，悪性インフレなど，平穏な日常が崩れ社会不安が高まっています。マスコミ，大衆の目はどこに向かうのか，そして資源に特に敏感な透析医療への影響が危惧されます。

2022年4月に診療報酬改定が行われ3カ月が経過しました。人工腎臓点数の大幅減という結果に将来の展望を失った会員も多いのではないかと推察します。さらに新たな点数も容易に請求できる状況でないことも判明し，特に隙間を埋めているような人手のない小規模クリニックへの影響が心配されます。冒頭の論文では，改定はコロナ禍という異例な状況下で行われたこと，また点数新設には医療費の収支相償という原則が貫かれていることに関係者の留意を求めています。利害関係のなかで行われる改定交渉ですが，関係者間の調整という本会の役割を改めて認識しています。

「臨床と研究」では，注目の論文が多数あります。4年前に困難な状況に直面した公立福生病院には保存的腎臓療法の先行的な取り組みを紹介いただきました。透析患者のサルコペニアは大きな課題ですが，腎臓リハビリテーション，カルニチン代謝，自重筋力トレーニング，など筋肉3本柱ともいえる具体的な対策論文を3編掲載できました。背景を理解すればすぐに役立つ内容です。健全・健康を究極まで求める治療と，いつかくる終わりを見据える治療，光と影ともいえる状況に透析医は幅広く対応しなければなりません。

「透析医（移植医）のひとりごと」は透析治療の発展に献身された3人の重鎮に執筆いただきました。脈々とつながる恩師との邂逅に感謝し，また高齢となってもなお医療の進歩に遅れまいとする姿勢，移植医としてCOVID-19最新治療への批判的吟味など，共感とともに沁（し）みる寄稿です。

少し落ち着いていたCOVID-19も第7波が猛然と襲来しました。本冊がお手元に届く頃はどうなっているか，しかし「継続」は透析の宿命です。会員の皆様にはご自愛をお願いします（7月22日 記）。

会誌編集副委員長 甲田 豊